**保険か保証か？ 2018 01 07**

**マルコ 1: 4-11 牧師　安達均**

集まりました会衆の上に主の恵みと平安が豊かに注がれますように！

世界情勢を見るにつけ喜ばしいとはいいにくいのだが、それでも新年のお喜びを申し上げたい。年の初め、だいたいは第二日曜になることが多いのだが、今年は第一日曜が主の洗礼日となった。第一だろうが第二だろうが年初に主の洗礼日を迎えることには、イエスの洗礼と自分の洗礼を振り返ることであり、信仰の出発点を確認することでもある。とても意味のあることだと思っている。

聖書の内容に入る前に、ちょっとみなさんに質問したい。　保険と保証の違いを考えたことがあるだろうか？　保険と言うと何かが起こってしまったときに役立つものとして自分で購入するもの。起こらなければ、保険は掛け金を払っただけで使われない。保証とはそのような保険とは異なって普通購入するものではないと思う。そして、いま動いていることが保証されている。その時点で生きている、役立っているもの、それが保証であると思う。

さてそれだけお話しておいて、聖書の話に触れていきたい。２週間前、イエスの降誕をお祝いした。しかし、イエスが生まれたのは12月25日だなどとは聖書のどこにも書かれていない。そしてクリスマスのイエス降誕の話は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書のうち、ルカ福音書とマタイ福音書にしか書かれていない。

それに比べて主の洗礼は四つの福音書全部に出ている。キリスト教の三つの有名なお祝いごとは、クリスマスとイースターとペンテコステといわれており、その三つの祝い事に主の洗礼は入っていない。たとえキリスト教三大祭りに入っていなくてもイエスの洗礼もとても大切な意味がある。

イエスが洗礼を受けたときの様子を今年はマルコ福音書から見ていきたい。洗礼者ヨハネが水で悔い改めの洗礼を授けていた。しかし、洗礼者ヨハネは自分より後に来られる方は、すごい方で、聖霊で洗礼を授けると語っていた。

すると、後から来られる方、つまりイエスがいざそこに現れると、ヨハネが言っていたようにイエスが聖霊で洗礼を授けるのではなく、逆にヨハネから水での洗礼を受けられる。すると大事件が起こるのだ。天が裂けて鳩のような聖霊がくだってきたのだ。

しかし、マルコによると、鳩のような聖霊がくだってきたのを見たのは、イエス自身が目撃していて、ほかの人々が見えたのかどうかさだかではない。　そして、さらに天からの声も聞こえてくる。　「あなたは私の愛する子」つまり神の子であると。

そして大切な意味があるとさっき申し上げたが、イエスが洗礼を受けてから、神の子の公共のミニストリーがはじまるのだ。こういう言い方ができるのではないだろか。イエスは洗礼を自らが受けることにより、永遠の命の保証を確信し、思いっきり公共の社会福祉時事業に献身していった。

イエスにより盲目の者が見えるようになった。足のなえた者は歩き出すようになった。しゃべれなかった人が神をたたえるようになった。そして、ユダヤのリーダたちにはじゃまもの扱いされ十字架に架け殺されようが復活した。　そして復活後40日経って天に昇っていかれた。

イエスが洗礼を受けた時に激しく聖霊が下り、イエスの人生のターニングポイントがあり、死んでも復活るするという永遠の命を保証されたイエスは社会奉仕に徹底的に尽くすことができた。　実は私たちの洗礼においても、同じ聖霊の力が働き、永遠の命が保証されて、思いっきり社会に尽くすための地盤ができるようになる。

いいえ、私たち洗礼を受けても聖霊は鳩のように舞い降りるなんていう光景は見えませんでした。また思いっきり社会に尽くすなんてこともできていません。ましてや永遠の命が得られる保険だか保証だかもわたしにはさっぱりわかりません。といわれる方もいると思う。

これらの疑問について、一点づつふれてみたい。マルコ福音書では聖霊が鳩のように降るのだが、それをごらんになったのは主イエスだ。　私たちの洗礼においても、聖霊がくだってきているのは、はっきりと、鳩のようなものが舞い降りる光景は見えなくても、イエスの受けた聖霊による洗礼と同じ洗礼が起こっている。

社会貢献もできてませんといわれるかもしれない。　しかし、教会はだれか一人の教会ではなく、社会貢献を一人でしているわけではない。私たちは世界のすべての兄弟姉妹とひとつの家族を形成している。その家族が教会。そしてその教会がイエスの体のさまざまな部分となって社会に貢献している。だから一人ひとりはほんの一部でしかない。

そして永遠の命の保険とか保証なんていうことも益々わかりにくい。永遠の命は、保険のように掛け金を払って買うものではない。　永遠の命は、イエスの信仰において、だまっていてもついてきてしまっているもので、それが永遠の命の保証。主によって永遠の命をいただいていることを覚え、喜んで主を崇拝し、他者に仕える生き方ができますように！